



2020.4.1 No.107 (季刊)

編集 国立ハンセン病資料館
発行 公益財団法人日本財団

目次

- P1 石井正則写真展 開催準備中
- P2 『国立ハンセン病資料館常設展示図録2020』
発行
- P2 家族問題などをテーマにイベントを開催

- P3 資料紹介 その⑥ 療養所の園誌
- P3 研究から 多磨全生園における史跡の記憶を記録する
- P4 資料館の現場から その⑬ 情報管理について
- P4 お知らせ／利用案内

石井正則写真展 開催準備中

資料館では、2月29日より開催予定だった石井正則写真展「13（サーティーン）～ハンセン病療養所の現在を撮る～」の開催を延期しました。開催時期は今のところ未定です。

石井正則さんは、お笑いコンビ「アリtoキリギリス」でデビューし、コンビ解散後も、俳優、タレント、ナレーターとして幅広く活躍中です。2016年～2019年まで3年間をかけて、プライベートで国立ハンセン病療養所13園をすべてまわり、大判カメラ「8×10（エイトバイテン）」などで、療養所の現在の姿を撮影しつづけています。

写しとられているのは、隔離のためのコンクリート壁（恵楓園）や入所直後に患者が入られた消毒風呂（愛生園）などの歴史的遺物や、2000年代になって建設された最新のケアセンターの建物（新生園）、近隣から多くの住民が花見に訪れる満開の桜（全生園）など、多岐にわたります。今回は、そのうち27点が展示されます。

石井さんは、10年ほど前にテレビのドキュメンタリー番組でハンセン病問題について知り、そこで苦難の人生を過ごしてこられたハンセン病当事者の歴史に衝撃を受け、「写真で記録に残さねば」と思い立ちます。重い歴史があった療養所の空気感を撮影するためには、手軽なデジタルカメラや35ミリのフィルムカメラではなく、手間と時間がかかる大判カメラでこそと考え、撮影を開始したそうです。

今回、展示予定の作品はすべて石井さん本人によ

る手焼きプリントです。デジタル写真を見慣れたわたしたちの目には、アナログ写真が持つ美しさも見どころのひとつとなっています。

石井さんは、「今回の写真展で初めてハンセン病問題を知った人が、それを入り口にして、資料館などでハンセン病問題や当事者が誇り高く生き抜いてこられた歴史を深く学んでもらえたら」と話しています。

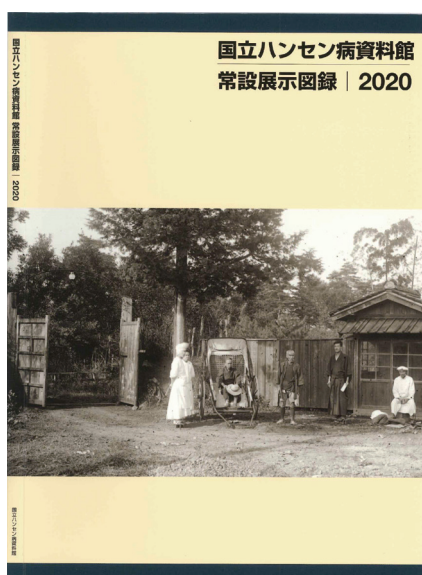
残念ながら新型コロナウイルス感染拡大防止のため写真展の延期だけでなく、3月8日（日）に予定していたトークイベント「ハンセン病療養所の写真と音楽」も、開催を見送らせていただくこととなってしまいました。4月19日（日）に予定している「ハンセン病療養所の写真と詩（ことば）」のトークイベントについては、HPなどで情報をご確認ください。

すばらしい写真の数々をご覧ください。写真展でするので、開催時期の決定を楽しみにお待ちください。

（木村哲也）



『国立ハンセン病資料館 常設展示図録2020』 発行



当館の常設展示図録が、『国立ハンセン病資料館常設展示図録2020』として3月20日付で改訂発行されました。A4タテ判、フルカラー、128ページと、前回発行した2012年版と同じ仕様です。

2017年、増刷に際し内容の点検を行ったところ、資料情報やテキストの引用部分などに、多くの誤記載が発見されました（2019年3月、当館ホームページに掲載）。改訂作業は一時停滞しておりましたが、2019年度に入り、担当課である事業課の中心事業の一つとして取り組んできました。

展示図録という性格上、改訂作業は展示そのものの誤記の修正と並行して行ってきました。そのため作業にかなりの時間を要し、長期間お待たせすることになってしまいました。常設展示図録の入手へのご要望にお応えできない状態が続いていたことについて、この場を借りて皆さまにお詫び申し上げます。

今回、展示および図録においてそれらの誤記を修正すると共に、各園の紹介を近年の変化を反映したものに差し替えたり、作品を更新したりといった新しい展示の情報もお伝えしています。2019年6月のハンセン病家族訴訟の判決や、同11月の家族補償法の制定など、展示に反映しえた部分についても、新たな動きとして盛り込んでいます。

ご見学後のふりかえりなどに役立てていただければ幸いです。
(西浦直子)

家族問題などをテーマに イベントを開催

事業部社会啓発課ではハンセン病問題への関心をもっていただくきっかけづくりを目的として、様々なイベントを実施しています。

昨年6月の家族訴訟の判決によりハンセン病家族に対する社会的関心が高まったことをうけ、12月13日（金）、14日（土）にフィリピン、マレーシア、ポルトガル、ブラジル、日本の各国から回復者家族をお招きし、シンポジウム「家族が語る もうひとつのハンセン病史」を開催しました。それぞれの登壇者が、病気と隔離による家族の絆の断絶、再会後の関係修復の難しさ、今も続く差別と苦悩などについて語って下さいました。当館のイベントに初めて参加されたという方からは、「生の声を聞き心が痛むとともに、もっと多くの人にこの現実を知ってほしい」とのご感想が寄せられました。

また、新たなイベントとして「歳時記」シリーズを始めました。12月21日（土）にはクリスマスお絵かきイベントを開催し、差別がなくなるように願いを込めて多くの方がお絵かきでクリスマスツリーに飾り付けをしました。1月4日（土）には療養所で行われていた正月行事を体験するイベントを実施しました。どちらのイベントにも小学生以下の多くの子もたちが参加して下さいました。

1月25日（土）には職業シリーズ第4弾として、国賠訴訟と家族訴訟の弁護団で活躍された赤沼康弘弁護士をお招きし、講演会「ハンセン病問題と弁護士の社会的使命」を開催しました。

今後もお客様のご意見に耳を傾けながら、一人でも多くの方に足を運んでいただけるようなイベントを実施していきます。
(大高俊一郎)



シンポジウム「家族が語る もうひとつのハンセン病史」の記念写真。

資料紹介 その⑥

療養所の園誌



今回は、図書室の資料から、ハンセン病療養所で発行されていた雑誌（園誌）について紹介いたします。

国立療養所多磨全生園の機関誌『多磨』は、前誌『山櫻』の創刊から、2019年で100周年を迎えました。『山櫻』が謄写版の文芸同人誌として始まったことからわかるように、ハンセン病療養所の園誌は、文芸誌としての色合いが強いものでした。全国の療養所から作品を募った「文芸特集号」も生まれ、選評には文芸各分野の著名人の名も見られます。1950年11月の『山櫻』第31巻11号「文芸特輯号」において創作部門の選者であった椎名麟三は「作品のレヴェルの高さに驚きました」と評しています。

また、園誌は、入所者による絵画や写真が表紙を飾ることもあり、それぞれの得意分野を発表できる場ともなりました。

入所者の文芸活動の発表の場としての役割が大きかった園誌ですが、時代と共に内容も変化しています。高齢化により入所者からの投稿が年々減ってきているのはさびしい限りですが、そのようななかでも、長きにわたり投稿を続けている入所者の文芸作品や記事は、現在の療養所での生活を私たちに伝えてくれます。

園誌は、療養所の歴史、入所者の思いのつまった貴重な資料です。図書室では全国のハンセン病療養所の園誌を可能な限り収集し、所蔵しており、園誌をデータベース化しています。当館ホームページでは全園誌記事の網羅的なキーワード検索ができ、また図書室の検索用のパソコンでは検索結果だけでなく記事自体もご覧いただけます。どうぞご活用ください。

(坂井直枝)

研究から

多磨全生園における史跡の記憶を記録する

当館学芸員の橋本彩香は、「多磨全生園における史跡の記憶を記録する一名誉園長・成田稔に聞く―」をテーマとして、聞き書きをつづけています。

話者の成田稔は、1955年から1993年に退官するまでの38年間、多磨全生園に外科医師、副園長、園長として在籍しました（現・名誉園長）。1927年生まれの92歳であり、おそらく施設側にいた人物としては、最も古い時代について証言が出来る人物です。

証言からは、園内にかつてあったとされる「監房の位置」について訂正がなされるとともに、かつての入所者や園の職員から聞いたとされる「監房の様子」についても生々しく語られました。現在では監房は取り壊され実在しませんので、こうした記憶・証言は貴重なものです。

当館では、職員による調査・研究等の成果を報告・公開する目的で、『研究紀要』を発行しています。最新の第7号が、3月31日付で刊行されました。

聞き取りの成果の一部は、この『研究紀要』にも発表しています。さらに聞き書きの範囲を広げ、内容を深め、公開に向けて努めてまいります。また、今後も学芸員による園内案内などの普及啓発事業に活用していくつもりです。

『研究紀要』第7号は、上記聞き書きのほか、学芸員による論文4本、共同調査報告2本、講演録2本を収録しています。希望者には受付で頒布していますので、どうぞご覧ください。

(橋本彩香)



聞き書きの様子。左が成田稔、右が筆者。

資料館の現場から その⑬

情報管理について

今回は情報管理について紹介します。主な業務は情報システムに関するハード面とソフト面の維持管理です。

ハード面については、展示室や図書室で来館者が利用するコンピュータを利用した展示システムの仕組みを支えるWebサーバや電子化された蔵書資料を蓄積するデータベースサーバ、職員が作成する文書ファイルや写真・映像などデジタル情報を保管するファイルサーバとそれらの機能とデータを消失しないようバックアップを行うイントラネットサーバの維持管理と職員が利用するクライアントPCや映像ホール・研修室の通信環境の整備です。

ソフト面については、資料館で所蔵する実物資料や文書資料のデータベース検索システムの構築や職員の勤務スケジュールを管理するグループウェアの管理、そのほか館内の業務を自動化・効率化するための情報処理と広報機能の一部を担うハンセン病資料館・重監房資料館の公式ホームページの日々の更新・視聴者調査です。

業務は、館内各部門の職員と連携しながら実施しております。また資料館で主催するイベントの様子をホームページに掲載するための記録支援を行う場面があり、その時は講演会にも参加して、お客様とともに幾度も感動する場面をご一緒させていただいております。

これからもハンセン病資料館に何度も足を運んでいただけるような、また遠方などでご来館が難しいお客様にも資料館が担う“患者・回復者とその家族の名誉回復”のための社会啓発活動の成果や、資料館に大切に保管されている貴重な資料をデジタルアーカイブを通じて活用していただけるような、よりよい情報管理を目指します。(平野顕)



国立ハンセン病資料館サーバ室

お知らせ

新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、2月29日(土)から3月19日(木)まで資料館は臨時休館となりました。

これにより、石井正則写真展「13(サーティーン)～ハンセン病療養所の現在を撮る～」の会期が延期となったほか、石井正則さんトークイベント「ハンセン病療養所の写真と音楽」、朗読会「療養所のなかの卒業文集『青い芽』の世界」、証言映像上映会、ミュージアムトーク、ハンセン病体験講話などが中止または延期となりました。

楽しみにして下さっていた皆様にはお詫びを申し上げます。

3月20日(金)以降についても、状況をふまえ予定が変更となる場合があります。詳しくは、当館HPまたは公式Twitter、Facebookをご覧ください!



当館HP

利用案内

■開館時間 9:30～16:30 (入館は16:00まで)

■休館日 毎週月曜日(祝日の場合は開館)
年末年始、国民の祝日の翌日、
館内整理日

■入館 無料

■交通

- ・西武池袋線 清瀬駅南口より
西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分
([「ハンセン病資料館」下車])
- ・西武新宿線 久米川駅北口より
西武バス「清瀬駅南口」行バスで約20分
([「ハンセン病資料館」下車])
- ・JR武蔵野線 新秋津駅より
西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分
([「全生園前」下車、徒歩10分])
または徒歩約20分

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13
TEL 042-396-2909 FAX 042-396-2981
URL <http://www.hansen-dis.jp>